魔女の棲む森

千咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔女の棲む森

【Ｎコード】
Ｎ１４５３Ｙ

【作者名】
千咲

【あらすじ】
目が覚めたら不気味な森の古びた館にいた。覚えているのは自分の名がアルバで、魔女であること。そして、世界にとって魔女は異質な存在であること。何もわからないままその館で過ごしているとある日、館の主である国の騎士様が現れて……。シリアス多めの恋愛ファンタジー。

1話　目覚め

ざわざわ。ざわざわ。

最初に耳に入った音は、森のざわめきだった。どこか不気味で、うなるような風の音も共に聞こえてくる。

ゆっくりと瞼を開けてみると一番に目についたのは古びた天井だった。明かりは無く、暗い。起きたばかりだからか視界が少しぼやけている。一度ゆっくりとまた目を閉じ、また目を開くと、変わりなくその古びた天井がそこにあった。よく見れば古びているけれどもしっかりとした作りで、高級感がある。どこかのお屋敷なのだろうか？

妙に頭がスッキリしている。ゆっくりと身体を起こしてみると身体も軽い。ギシリと自分が寝ていたベッドが軋む。そのベッドも広くてふかふかだ。

ぐるりと頭を動かし、室内を見てみればどれもこれも高級そうな家具たちが忘れられたように静かにそこにいる。やはり、金持ちの古い屋敷のようだ。

ざわざわ。ざわざわ。

外から変わらず不気味な森のざわめきが聞こえてくる。時折強い風が窓を叩く。

「あ……。」

指先を喉にあて、声を出してみる。少し掠れた、高い声が口から零れた。

ベッドから降りるためにベッドの上を這って端っこへくると真っ黒のパンプスが床にあった。踵の部分を指先で引っ掛けて持ち上げてみれば埃一つ被っていない。履いてみればぴったりだった。

立ち上がって壁際に立てかけられている大きな姿見へと近づく。少しばかり足がふらつくのは長い間眠っていたせいだろうか。

姿見に映ったのは幼さを少し残した少女の姿だった。艶やかで真っすぐと腰まである長い黒髪。切れ長のぱっちりとしたシルバーの瞳。白い肌に一際目立つ真っ赤な唇。

ちぐはぐだと思った。自分の容姿に。記憶に。存在に。

鏡の中にいる少女は嘲笑う。

「あなたは、誰？」

「あたしは、アルバ。」

凛とした声が室内に響く。鏡の中の少女は冷めた目で問う。

「あなたは、何？」

「あたしは、魔女。」

「そう。ありがとう。」

最後に鏡の中の少女はにこりと笑った。

アルバはすぐさまその笑みを消し、頭を振る。自分の行動があまりにも馬鹿馬鹿しかったからだ。

「馬鹿みたい。何してるんだろ、あたし。」

あたしはアルバ。魔女。目覚めた瞬間からわかっていた。でも、それだけ。それ以外のことは全くわからない。目覚める前の全ての記憶がない。ただただ空白の記憶の中に、自分の名がアルバで魔女であることだけが浮かんでくる。そして不思議なことに、記憶が全くないというのに一般的な知識はある。目の前に自分の姿を映す物は鏡だとわかるし、言葉も喋れる。……この世界で魔女が、異質だということも。

アルバは振り返り、鏡から窓へと視線を移した。迷いなく指先を窓へ向け、空間を引き裂くように斜めに滑らせる。するとけたたましい音を立て窓ガラスが割れた。

アルバは無表情で割れた窓を見つめる。驚きはなかった。だって、自分は魔女だから。

まるで何かを諦めたかのようにアルバは息を吐き出した。

それから、先ほど斜めに滑らせた指先を巻き戻すようにまた滑らせると床に飛び散った破片がかたかたと動き、割られる前の状態へと戻る。魔法の使い方もバッチリなようだ。

「本当に、ちぐはぐ。」

アルバは現実から目を背けるようにまたベッドへと戻り、身を投げ出した。

2話　一瞬の魔法

「東の森をなんとかしてこい」。そう、王から命を受けたのは1週間程前。

”どうして今更東の森？”

東の森とは膨大な土地と民、資源に溢れたサディアス国の東に位置する森のことだ。サディアス国は平和な国として知られているが、東の森は凶暴な魔獣や盗賊たちの巣窟であり、一般人は誰も足を踏み入れない土地。誰も足を踏み入れないから、王国側も特別手を付けていない無法地帯だったのだが、本当に、どうして今更。

疑問を抱きつつもフランは城を出る準備をした。それは4日前のことだ。

「完全にはぐれたな…。」

フランは馬上でザアザアと自分の身に降り注ぐ豪雨を忌々しげに睨みつけ、目にかかる長いプラチナブロンドの髪を片手でかき上げた。

城のある王都から馬を走らせて3日。東の森にある遠い昔に忘れられたフランの家の別荘である館を拠点にするため、部下たちと共にそこを目指していたのだが、予期せぬ雨と突如現れた魔獣のせいでどうやらフランは部下たちとはぐれてしまったようだ。

容赦なく身体を叩き付ける雨はどんどんフランの体温を奪っていく。

このままではまずいと思い、フランは部下たちとの合流を諦めて一人馬を走らせた。

しばらく馬を走らせていると、大きな木に囲まれた妖しげな館が見えてきた。都合の良いことにそこは、フランたちが目指していたフランの別荘だった。

薄暗い森にとても良く似合う古びた洋館。近くに崖でもあるのか、ゴオッと不気味な風の音が聞こえてくる。それが増々館を不気味に思わせた。

フランは馬から飛び降り、近くの木へと手綱をしっかり結んだ。

館の鍵は自分が持っているので休むことは可能だろうと思い、館の扉に鍵を差し込み、回す。

しかし、ひっかかる感触がない。

不思議に思いながら、フランは扉を開けると妖しげな音を立て、扉は開いた。…まさか、知らぬ間に盗賊たちの集会所にでもなっているのではないだろうか。端正な顔をめんどくさそうに歪ませ、一歩中へと足を踏み入れる。右手はしっかりと腰に指してある刀を握っている。

気配を探りながら歩を進めて行くと先ほど入って来た入り口の扉がけたたましい音を立てて閉まった。たぶん、風のせいだろう。

極力足音を立てぬように気を配りつつ2階に続く階段を上って行く。

館の中は外よりも薄暗く、視界が悪い。心の中で舌打ちをしながらもフランは気を引き締めて館の中を進んで行く。足に迷いはない。

盗賊がいると踏んでいたが、見てみる限りでは大勢の人間が館に侵入した形跡は見つからなかった。

窓を叩き付ける豪雨と、不気味な風の音。いつの間にか雷も鳴り始めたらしく、時折耳をつんざくような音が外から聞こえてくる。

いい加減冷えきった身体を温めたい。

はぁっと吐き出した息は暗がりでも白く浮き上がって見えた。

フランはとある部屋に行き着いた。館の一番奥にある部屋だ。今まで見て来た部屋を考えると、多分自分の先祖の寝室であった場所だろうと思う。

部屋の中から物音はしない。

だが、不思議な気配がする。

その気配は人でもなく、獣でもない。まさか幽霊か？とフランの頭に浮かんだが、馬鹿馬鹿しくなりその考えを振り払った。

一気に扉を開け、中にいるその不思議な気配へと間合いを詰め、喉元に切っ先を突きつけた。室内の空気はとても冷たい。

「人様の館で、何をしている？」

低く低く囁く。自分よりも頭一つ分程背の低いその不思議な気配の持ち主を見下げれば、腕の中で身動き一つせず、ゆっくりと顔を上げた。

「お、んな…？」

思わず口から零れ出た声は自分でも驚く程に頼りなく、掠れていた。喉元に刃物を突きつけられているというのに腕の中にいるそいつは無表情でただぼうっとフランのことを見つめた。腕に当たるさらりとした長い黒髪がこそばゆい。

フランも呆然と腕の中にいる女を見つめる。否、目が放せないのだ。雪のように真っ白な肌に一際目立つ真っ赤な唇。腰まで流れる黒い髪。そして、ガラス玉のようなシルバーの瞳。

まるで職人が丹誠込めて作り上げた人形のような美しい女。

引き込まれた。今にも壊れてしまいそうに揺れるその瞳に。一瞬で。

見つめ合う時間がまるで永遠のように感じた。

3話　一時休戦

「誰…？」

ぽつりと呟かれた言葉にフランはハッと我に返った。わけのわからない目の前の女に見惚れるなんてどうかしている。

「お前こそ誰だ。ここは俺の館だぞ。」

「あなたの、館なの？」

ゆっくりと真っ赤な唇から紡がれた問いにフランは首を傾げる。

東の森は普通なら一般人は決して立ち入ることはしない。盗賊や犯罪者なら仕方もないが、目の前にいるのは女だ。もしかすると、盗賊たちに誘拐されたのかもしれない。容姿も容姿だ。それなら頷ける。

一つの仮説に辿り着いたフランはどうしようかと悩んだ。仮説は仮説だ。このまま身を引くわけにもいかない。

フランが黙り込んでいると目の前の女が眉間に皺を寄せた。

「……っ！？」

すると、突如腕に違和感を覚える。動かない。

なんとかしようともがけば筋が引きつるように痛みが走るだけ。つい、しっかりと握っていた刀を落としてしまった。気付けば女は腕の中から抜け出し、少し離れた位置から冷たい目でフランを見ていた。

「な、にを、した…？」

背筋に冷や汗が伝う。冷静になるようフランは自分に言い聞かせる。

「突然、刃物突きつけるほうがおかしいじゃない。」

「勝手に館に侵入したお前が悪いんだろ。」

「…勝手に？」

女は顔を幾分か引きつらせる。感情表現が苦手なのか、ほぼ無表情には変わりはない。

「知らない…。あたしだって、どうしてここにいるか……わからないんだから。」

まるで独り言のように女は言った。憂いを帯び、ゆらゆらと揺れる銀色にフランは再び見入る。その瞳にただされるように、フランは口を開いた。もう、もがくのは辞めた。

「……わかった。一時休戦だ。お前の話を聞く。それはお前が持っていていい。」

それ、とフランは自分が落とした刀を顎で指した。少し迷ったように刀とフランを交互に見やった後、女は流れるような動作で床に落ちた刀を手に取る。それから、フランに指先を向け、横にスッと引いた。

宙で固まっていた腕が自由になる。フランは一つ長く、息を吐き出し、近くにあったベッドの端に腰掛けた。忘れていたが、今更になって雨に濡れた身体が冷えきっていたことに気付く。

「さみっ…」

思わず呟くと、未だ警戒心の籠った視線をこちらに向けていた女が困ったように眉間を寄せた。女は両手に抱えていたフランの刀を片手に持ち直し、掌を返し、口元に持って行く。ふうっと女は息を吐いた。

女の行動を黙って見ていたフランは冷えていた身体が徐々に暖まっていくことに気付く。濡れていたモスグリーンの軍服もすっかり乾いていた。

「どう、なってるんだ?…魔法みたいだな。」

軽く笑みを浮かべながらフランは言う。フランらしくない言葉だった。女は先ほどと変わらずその場に突っ立ったままフランを見ている。

「魔法だよ。」

「は?」

「だって、あたし、魔女だもの。」

軽口で言ったつもりが本気で返されてしまい、フランは言葉をなくす。女の目は確かに本気だった。

4話　白紙

目が覚めてからどれくらい時間が経ったのだろうか。頭の中はずっと空っぽで、自分のことを考えることはとうに諦めてしまった。毎日、寝て、起きて、食べて、飲んで、また寝て。その繰り返し。幸いこの館には井戸水が引いてあったため、水は困らなかった。食料も館の周りが森のため、適当に果物を取って口にしていた。

そんな生活をしていたある日、非日常が訪れた。

アルバは人一人分程距離を取った位置でベッドに腰掛けている男を見た。

綺麗なプラチナブロンドの少し長めの髪に、真っ青な瞳で目は少しだれ気味、モスグリーンの軍服を身に纏っている。一見細身に見えるが、軍服を着ていることを考えると服の下はきっと鍛えられているのだろうと安易に予想がつく。

アルバは腕の中にある刀をぎゅっと握りしめた。先ほど、この目の前の男に喉元に突きつけられた物だ。

「俺はフラン。王国騎士団所属。位は大佐だ。」

フランと名乗った男は真剣な目でアルバを見据える。真っ青な瞳はどこまでも深い海の色のようだとアルバは記憶にない海のことを考

えた。

視線で名を名乗れとただされ、アルバもゆっくりと口を開いた。

「アルバ。」

「アルバ、か。」

コクリとアルバは頷く。フランは本気で一時休戦するつもりなのか、喉元に刀を突きつけられた時のような殺気がない。そのことにアルバは少し安堵する。

「さっき…アルバは自分がここにいることがわからないと言ったが、本当に何もわからないのか？」

「……目が、覚めたら、そのベッドで寝てた。」

アルバはフランからベッドへと視線を流す。フランも釣られて、視線を自分が腰掛けているベッドへとやった。やはり、盗賊にでも誘拐されたのではないだろうかとフランは思う。

「アルバの家はどこだ？サディアスの出身なら家まで送ってやることは出来る。」

ベッドからまたフランは視線をアルバに戻す。そして、少しばかり目を見開いた。アルバの表情は変わらず無表情だが、幾分か顔が青白かった。

「どうした？…具合でも悪いのか？」

アルバはふるふると小さく首を横に振った。頭に合わせて長い黒髪がゆらりと揺れる。どこもかしこも美しい女だとフランは改めて思った。

「わからない。」

「わからない？」

「自分の家なんて、知らない。」

真っ赤な唇からアルバは淡々と言葉を紡いでいく。なるべく、声が震えないように。

「だって……あたし、記憶がないんだもの。」

どうにもならない現実に胸を鋭い刃物で突き刺されたような気がした。

5話　雷鳴

嫌な沈黙が二人の間に降りる。

アルバの予想だにしない答えにフランは難しい顔をした。窓の外ではゴロゴロと雷鳴が轟く。その音が、やけに雰囲気を醸し出していた。ちかちかと暗い窓の外から光をちらつかせる。

突然、ドンッと一際大きな音が落ちる。

「…っ！」

音と同時にアルバの肩が大きく跳ねた。そのことにフランは驚く。

まさか、雷が、恐い…？

無表情なのは変わりないが、目を凝らしてよく観察してみればキャミソールのワンピースのせいでむき出しになっている細い肩が微かに震えている。先ほどから顔色も悪い。感情表現な苦手なのだろうと思っていたが、ちゃんと見ていればアルバはちゃんと感情を表に出している。

なんだか先ほど警戒心をむき出しにしていた自分が馬鹿馬鹿しく思えてくる。

フランは肩の力を抜き、表情を和らげた。それから、自分の隣をぽんぽんと手でたたく。

フランの行動がわからず、アルバは首を傾げた。

「恐いんだろ。雷。」

「え？」

「我慢してないで来いよ。隣。」

ちょっとだけ驚いた表情をするアルバ。仕方も無い。目の前の男は先刻、突然自分を殺そうとしていたのだ。そんな人物に突然優しくされたら、どうすれば良いかわからなくなる。

「でも……ひっ！」

再び大きな音が落ち、アルバは小さな悲鳴をあげた。恐くてどうしようもなくなったアルバは怪訝な表情を浮かべつつも早足でベッドへと近づく。ポスリと若干フランから遠い位置に腰掛け、膝を抱えた。

アルバからのあからさまな警戒心にフランは少し微妙な気持ちになる。仕方が無いとは思うけれども。

沈黙の中、フランは改めてアルバを見つめた。

どこを見ているのかわからない、朧げなシルバーの瞳。暗がりでも目立つ魅惑的な唇。腰まで流れる艶やかな黒髪。髪と同じ色のキャミソールワンピースから覗く白い肌は艶かしい。肩も、腕も、ワンピースの裾から惜しげもなくさらけ出されている長い足も、細い。そして魅力的だ。

まるで人形のような美しい女。

フランはフランで大佐という立場であり、富も、力もある。高い身長に美形というオプションも付けばその辺の女は放っておかないであろう。フランはモテる男だった。

今までたくさんの女に出会って来て、その中にも美しい女は何人もいた。だが、アルバほど人間離れした女は初めてだった。

ジッと観察していると、アルバは突然左手を持ち上げ、パチンと一つ、指を鳴らした。

それと同時に、壁に備え付けられているランプが明かりを灯される。

「魔女、って言ってたっけな。そういえば。」

ランプに灯された炎がゆらりと揺れた。

「魔女とか、まるでお伽噺みたいだな。」

”魔女”。この世界では異質な存在。フランは、不思議な気分になった。

「……うん。」

その夜、雷鳴を聞きながら二人は夜を明かした。

6話　存在

微睡みの中、小鳥のさえずりが聞こえる。ぼんやりと瞼に温かい光を感じる。きっと、カーテンの隙間から日の光が差し込んできているのだろう。

「おい。」

誰かの声が聞こえる。アルバはあれ？と思う。

まだ、起きたくない。

まだ、あたしに夢を見させて。

「おい、アルバ。」

名を呼ばれた。

あたしの名前、だ。誰？誰だっけ？

「アルバ、起きろ。」

「んっ…。」

身体を揺さぶられ、アルバはゆっくりと瞼を持ち上げた。ぼんやりと白く霞がかった視界に映るのは金髪と碧。

「だ、れ…？」

喉から寝起きの掠れた声が小さくこぼれる。目を慣らすようにパチパチと何度か瞬きをすれば視界がクリアになった。

朝日にキラキラと輝く金色の髪。少し焼けた肌。青い瞳。釦を3つ程外し、白いシャツをラフに着こなす男は困ったように頭をかいた。

誰、だっけ。

「忘れたのかよ。フランだ。」

「フラ、ン？…あ。」

思い出した。昨日突然殺されかけた男だ。そういえば、いつの間に寝たのだろうか？

アルバはゆったりとした動作で身体を起こしつつまた記憶を振り返る。

雷が鳴ってて、恐くて、フランがベッドに座って、隣に座って……

そこからの記憶がない。たぶん、知らぬ間に寝てしまったのだろう。
そこまで思い出した時、カタリと手元に固いものがあたる。視線を手元に向けると、刀があった。フランの刀だ。

「おはよう。」

「…おはよ。」

フランは昨日と打って変わって、爽やかに挨拶をした。アルバはそれに戸惑いつつも挨拶を返す。初めての朝の挨拶だった。
アルバは手元にある刀を手に取る。細長いそれは、重かった。

「それは…まだお前が持ってろ。」

「…あたしが寝ている間に奪えばよかったじゃない。」

フランは少し考える。確かに。と思った。しかし、そうしなかったのはたぶん、相手がアルバだったからであろうと思う。アルバは、フランに対して警戒はしているが、殺気が全くない。無表情の彼女の考えなど全くと言って良いほど読めないが、人間に害を与えるような奴ではないと、フランは本能で悟ってしまったのだ。だから、刀をアルバに預けたままなのだ。

「飯、出来てるぞ。」

「ご飯？」

「飯食い終わったら、話がある。」

「話？」

ぼんやりとまだ働かない頭で自分の処遇についてだろうな、と予想する。自分には世の人間をどうこうするつもりはないが、普通の人間からしたら魔女なんて脅威でしかない。仕方のないことだった。

アルバは一度、目を閉じてからフランにわかったと返事をした。

テーブルの上には温かいスープと果物が並べられていた。フランはアルバが眠っているうちに森へ出て材料を調達しに行っていたのだ。

「いただきます。」

「…いただきます。」

フランは手を合わせ、食事の挨拶をし、黙々と食事を始めた。アルバはジッとフランの行動を見た後、見よう見真似で食事の挨拶をし、

食べ始めた。

「…美味しい。」

水水しい果物の汁をこぼさないように気をつけながらアルバは黙々と食事を続けた。人と食事をするのも、ちゃんとした食事も、全部が全部初めてだった。フランはそんなアルバをちらりと盗み見、こっそり笑みを浮かべた。

皿の上の物がなくなった頃、フランはようやく口を開いた。

「アルバが今までの記憶がないのは、間違いないんだよな？」

アルバはコクリと頷く。それから、意を決したように真っ赤な唇を開いた。

「目が覚めた時、あのベッドで眠ってた。頭の中が空っぽで、何もわからなかった。」

呟くようにぽつりぽつりとあの日のことを思い出しながらアルバは言う。フランは一言一句それを聞き逃さないように耳を澄ました。真剣だからか、自然と背筋が伸びる。

「空っぽの中に、あたしの名前がアルバってことと、魔女であるってことだけがぽつんてあった。」

銀色の瞳には何も映していない。アルバの背後にある窓から差し込む朝の光が、まるで後光りのように見えた。

「…魔女が、この世界で異質ってことも。」

この女は自分の立場をちゃんと理解している。フランに対し殺意がないあたりを考えると、容易に想像はついていたことだ。

「アルバ、」

「ねぇ、フラン。」

フランの言葉をアルバは遮る。フランは、初めてアルバの銀色の瞳に光を見た。

「あたしは、あたしのことを知りたい。過去を。存在する意味を。あなたたち人間に危害を加えるつもりはない。…信用してくれなんて言わない。だから、もし、あたしがあなたたちに何かしようとしたら、」

スッとアルバの目が細められる。懇願する瞳だった。フランは息をのむ。

「あたしを殺して。」

アルバは近くに立てかけておいたフランの刀をテーブルの上にごとりと置いた。

静寂が訪れる。外から聞こえてくる鳥のさえずりが、酷くこの場に不釣り合いだった。

フランはアルバの真剣な瞳を見て、一つ息を吐いた。

「わかった。魔女が異質であることは確かだし、俺たちにとっては脅威になる。アルバのことは俺の独断で決めるわけにはいかないからサディアス王に話を通す。」

フランは大きくを息を吸い込んだ。

「それまでは、アルバの命は俺が預かる。」

二人の言葉に、後悔はなかった。

7話　苦手

朝食を済ませ、アルバとフランは静かにお茶を飲みながらくつろいでいた。そこに、先ほどまであった警戒心は無く、ゆったりとした和やかな空気が流れていた。きっと、お互い抱えている胸の内を伝えられたからだろう。

アルバはぼんやりとカップに入った紅茶を見つめながら、ふと疑問を抱いた。

「フラン。」
「何だ？」
「フランは、どうしてここに来たの？」

フランは窓の外にやっていた視線をアルバに向ける。アルバはまるで幼い子供のようなあどけない表情でフランを見つめていた。

アルバは一見大人っぽい外見をしているが、表情や言動に幼さ見え隠れしている。年齢不詳。魔女らしいなんてフランは思った。

「東の森にいる盗賊と魔獣の討伐のために飛ばされたんだ。」
「ここは東の森っていうの？」
「ああ。サディアス王国の東側に位置しているからな。」

頭の中でアルバは世界地図を思い浮かべてみたが、何も浮かんでは

こなかった。一般知識はあるが、この世界についての知識は皆無のようだ。

それを見かねてか、フランは苦笑をもらし「今度、地図見せてやるよ。」とアルバに約束した。

「フラン大佐！！！」

バンッとドアを蹴破るようなけたたましい音が館内に響く。ビクリとアルバは肩を跳ねさせたがフランは動じていないようで、何食わぬ顔で出入り口を見ていた。それでも騎士らしく、片手は刀の柄を握っている。

「フラン大佐！ご無事ですか！！」

男性の低い声が聴こえる。フランよりも低い声だ。

フランはよく知ったその声を聞き、刀から手を離した。

「ザン！」

声の主に向かい、フランは声をあげる。ザンとは、たぶん声の主の

名前なのだろう。ザンと呼ばれるその男はフランの事を「大佐」と呼んでいたし、フランの部下なのだろうと推測する。アルバは冷静に解釈しながらフランを見つめた。

しばらく待つと、軍服を身に纏った背の高い男が室内にドタバタと入って来た。

「フラン大佐！ご無事で何よりです。」
「ザンこそ。他の奴らはどうした？」
「館の外にて待機しています。」
「そうか。」

そこで初めて、男はアルバに視線を向けた。アルバは椅子に腰掛けたままの姿勢で男を観察する。この男がザンという人なのだろう。

ザンはフランよりも幾分か背が高く、ガッシリとした筋肉質な体型をした男だ。高い位置で結われた銀の髪がゆらりと背に流れている。切れ長のグレーの瞳は鋭く細められていて、目つきが悪い。しかし、綺麗な顔立ちをしていた。フラン程甘さはないが、中性的な顔立ちをしている。

ザンはあからさまに怪訝な表情を浮かべた。

「こちらの方は？」

鋭い視線がアルバを突き刺す。居心地の悪さを感じながらもアルバ

はいつもの無表情でその視線を流した。

「アルバだ。この館で見つけて保護することにした。詳しいことは後で説明する。」

ジッとザンはアルバを見つめた。胸に妙なざわめきを感じる。ザンは普通じゃない何かアルバから感じていた。

「…訳ありですか。」
「そんなところだ。アルバ、こいつは俺直属の部下のザンだ。」
「サディアス王国騎士団、フラン隊所属のザン大尉だ。」
「……アルバです。」

ぽつりとアルバは言った。それにまたザンは顔をしかめる。あからさますぎる嫌悪だった。アルバもアルバでそんなザンを見て少し顔をしかめる。

この人、苦手だ。と初対面ながらもアルバは思った。

8話　人

館の外にいた隊士たちを館内にて休息をとらせた後、フランとアルバ、そしてザンはアルバが一番最初に目覚めたあの寝室へと移動した。ザンにアルバのことを説明するためだ。

アルバは魔女である。

魔女は、この世界では異質な存在だ。もし、アルバの存在を知った良からぬ者がアルバの力を利用でもしようと考えたら国の脅威となるであろう。そう考えたフランは自分の信頼を置けるザン以外の隊士にはアルバが魔女であることを伏せることに決めた。ザンにはサディアス王にアルバのことを報告し、王の判断を持ち帰って貰う任務を頼んだ。

「陛下によろしく伝えてくれ。」

「……分かりました。」

「頼んだぞ。」

ザンは相変わらず眉間に深い皺を刻みつつ、フランから王に届ける書状を受け取った。

ベッドの隅に膝を抱えて座るアルバはぼんやりと二人のやりとりを見ていた。自分のことなのだが、特に興味がわかなかった。アルバにとって、その話はフランと交わした約束によりもう終わった話だからだ。

「しかし、魔女と言って、陛下は信じてくださるでしょうか？…私とて信じられない話ですし。」
「…信じられない気持ちはよくわかる。が、アルバが魔女であることは真実だ。アルバが魔術を操っているところはこの目で見ている。」
「危険ではないのですか？」

危険。その言葉がじわりとアルバの心の奥底に沈んでいく。
フランはザンの言葉に顔をしかめた。ザンの言い分はよくわかるが、アルバのことを想うとザンの直接的な言葉は胸を締め付けた。

「あたしが、」

その時、ずっと黙っていたアルバが口を開いた。ザンは口を挟むなと言いたげな表情をアルバに向けるがアルバは言葉を続ける。
凛とした声が室内の空気を変える。

「あたしが、もし、あなたたちを傷つけるようないことをしたら、殺していいよ。」

ザンは目を見開いた。アルバの目は嘘をついていない。本気だ。

しばし沈黙が続き、それを打ち破るようにザンは大きく息を吐いた。ザンのそれは、呆れ。それと同時に了承の意味も含まれていた。フランはそれを見て安堵の表情を浮かべる。

「では、私は陛下の元へ行くとします。」
「頼む。」
「いえ。どういう返事がきても、恨まないでくださいよ。」
「わかってる。」

ザンはフランに一礼すると部屋を後にした。

ザンが退室したことにより先ほどまでピンと糸を張りつめたかのような空気がプツリと消える。

アルバは座っていたベッドにそのまま後ろに倒れた。一見無表情だが、どこか疲労が伺える。

アルバは瞼を閉じ、一つ、長く息を吐いた。

フランに出会ってからというもの、静かだった日常がガラリと変わった。アルバにとっては好ましいことなのだが、いかんせん人と接するということに慣れていない。神経を使う。だから、疲れる。

「アルバ。」
「ん？」

アルバが寝そべるベッドに腰掛けた。ギシリとベッドが軋む。

「ザンは良い部下なんだ。さっきのは見逃してやってくれ。」

アルバは閉じていた目を開き、フランを見た。フランはアルバをジッと見つめていた。眉間に皺がよっている。

「…別に。彼の態度は当たり前のことだと思う。気にしてない。」

アルバの本心だった。アルバは自分の立場をよく理解している。フランだって、最初こそは警戒心をむき出しだった。今は打ち解けたところがあるせいか全然警戒心が伺えない。そこが、アルバは少しばかり不思議だった。自分は、魔女なのに。世界の異物なのに。この短時間の間でフランの心境に何があったのかアルバには見当もつかない。魔法を使えばフランの考えていることなどすぐわかるが、人様の胸の内を勝手に覗くのはなんだか気が引けるのでアルバはしたくなかった。考えるのも面倒である。自分自身がわからない状況なのに他人のことまで考えてなどいられないのだ。

「……そうか。」

フランはアルバの返答に安堵の表情を浮かべた。

フランの部下であるザンは結構神経質な男だ。例え自身の上司であ

るフランがアルバに気を許していても、自分が安全と認めない限りとことん警戒する。そんな男なのだ。

そのことでアルバが傷ついてしまわないかフランは心配だった。しかし、その心配は必要なかったようだ。

アルバは少しずつまどろみの中へと船をこぎ始めた。

「……寝る。」

「ああ。」

ぽつりと小さく呟かれた言葉にフランは笑みを含ませながら「おやすみ。」とアルバの髪を梳ながら言う。

アルバはゆっくりと夢の中へと落ちていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1453y/

魔女の棲む森

2011年11月28日06時52分発行